



気になる墓

父が眠る墓地は、大阪北部の山の上にあります。伊丹飛行場や大阪市内を一望できる墓地。そこに、気になる墓が建っています。

形は普通の墓。「〇〇家之墓」とあるだけです。数ある墓のなかで、目立つ墓ではありません。しかし、墓標が気になります。大きく「本籍済州道〇〇〇」と、字名まで本籍が書かれています。そのほかにも、日本で



の俗名も書かれています。ご家族のお墓を長男さんが建てられた印象。お父さんは2007年に96歳で、お母さんは1998年に90歳で、奥様は1997年に52歳で亡くなっています。墓標に掘られた文字の行間に、ご家族の故郷への想いが思い浮かびます。

今はリゾートとして有名な済州島ですが、重い歴史があります。1948年に起きた四三事件と呼ばれる大虐殺事件。第二次大戦後のアメリカとソ連の対立により、韓国が南北に分かれる時期に起きた事件です。やや左翼的な傾向を帯びる済州島の自治組織に対する弾圧がエスカレートし、島民の蜂起を引き起こした事件です。一部の島民が山に立てこもり、軍隊が出動して排除する。一般住民は山に追いやられ、1年ほどの間に3万人とも5万人ともいわれる方が亡くなっています。島民の



▲墓標

2割にもなろうかという数です。村ごと亡くなった場所もあります。苦勞をして密出国した方もたくさんおられるでしょう。

しかも、この事件が韓国で表立って語られるようになったのは2000年前後から。それまで50年くらいは闇に葬られていました。

大阪には韓国の方が数多く暮らしておられます。その半分ほどは済州島出身者とのこと。第二次大戦前から大阪と済州には定期船があり、多くの方が済州との間を行き来していたようです。四三事件の時には、大阪にいる知り合いを頼り、難民に近い形で逃げてこられた方も多いただろうと思います。

日々の職場で、部下や上司がどんな生活史を背負って働いておられるのかを意識することは、あまりありません。また、職場でそれを重視する必要もないでしょう。しかし、1人ひとりの方が背負われた荷物を感じ取る感受性と、できる範囲の配慮を行う程度の能力は保っておきたいものです。その力が、人事的な問題を発見する力の源泉となる気がします。

(MBO実践支援センター代表)